

- 硫黄島を攻略した米軍は息もつかせずに沖縄へ
 - ▽昭和20年3月26日 慶良間列島に上陸
 - ▽27日には 関門海峡に 機雷1千個を投下
 - 「飢餓作戦」投下された機雷は1万2千個
 - 日本列島は封鎖され 窒息寸前に
 - ▽4月1日朝 沖縄本島上陸作戦
 - スプルーアンス大将(第5艦隊司令官)率いる
 - 艦船1317隻 艦載機1727機
 - 兵員45万 上陸部隊は12万
 - ▽日本は 第32軍(牛島満中将)を中心に 約10万
 - 陸軍6万7千 海軍陸戦隊8千
 - 防衛召集した 中学校 女学校の上級生など
 - 「県民部隊」の現地義勇兵 2万5千
 - ▽参謀本部にとって「沖縄戦」の位置付けは
 - 秋ごろに予想される 本土上陸に備え
 - 出来るだけ 米軍を食い止め 時間を稼ぐこと
 - ▽第32軍も 拠点陣地に拠っての 出血持久作戦
 - 米兵が「エープリル・フールか」と云うほど
 - 出血もなく その日のうちに 5万人が上陸
- 小磯国昭内閣が総辞職したのは4月5日
 - ▽きっかけは 対重慶和平の「繆斌工作」
 - ▽辞職の決意を固めたのは 陸相兼務の希望を
 - 陸軍から 素気なく 拒否されたためだった
 - ▽陸軍は 本土決戦に備え 全国を東西2軍管区に
 - 第1総軍(贛)司令官に 陸相の杉山元元帥
 - 第2総軍(湘)司令官に 畑俊六元帥
 - 陸相には 阿南惟幾大将 4月8日発令の予定
 - ▽小磯が 繆斌問題で 天皇に呼び出された3日
 - 陸軍人事内奏のため 参内した杉山から
 - 「いい機会だから、君の了解を得ておきたい」
 - ▽閣僚更迭を 首相に 一言の断りもなく決める
 - 陸軍が いかにも 首相を軽く見ていたか
 - ▽陸軍は 弱体な小磯内閣を 見限っていた
 - 陸軍省軍務課は 3月30日 3文書を作成
 - 「小磯内閣退陣指導要領」「新内閣組織要領」
 - 「陸軍現役軍人二大命降下セル場合ノ措置要領」
 - 後継首相に 梅津美治郎参謀総長か畑を希望

小磯 国昭(こいそ・くにあき)

明治13(1880)～昭和25(1950)栃木県生まれ。陸軍大将 陸軍軍務局長、次官、朝鮮軍司令官を歴任、昭和13年予備役。拓務相、朝鮮総督。19年7月首相となるが、20年4月辞職。A級戦犯で終身禁固刑

牛島 満(うしじま・みつる)

明治20(1887)～昭和20(1945)鹿児島県生まれ。陸軍中将。第11師団長、士官学校長を歴任、昭和19年第32軍司令官。沖縄戦の指揮をとり自決、大将に進級

…… 繆斌(みょうひん)工作 ……

国民党中央委員の繆斌は、南京に汪兆銘政権が出来ると国民政府立法院副院長に就任したが、日本の敗色と共に重慶と連絡を試みて発覚、考試院副院長に左遷されていた。

小磯は3月16日繆斌を飛行機で東京に呼び寄せ、21日の最高戦争指導会議に繆斌を通じて重慶との交渉を提案した。蒋介石の斡旋で連合国との和平を構想したが、南京政権解消が前提となる。重光葵外相や陸海軍も反対、昭和天皇も小磯に繆斌の帰国を命じられ、繆斌工作は挫折した。

繆斌の重慶側の接触相手は、特務機関幹部・戴笠だったといわれ、戴笠が終戦直後、飛行機事故で死亡すると、繆斌は直ちに「漢奸」として処刑された。重慶中枢が関与していて、その暴露を防ぐため素早く処刑したのだともとれるが、日本の敗北が確定的のこの時期、蒋介石が日本と和平の意思を持っていたかどうかは疑問であり、やはり、日本と南京政権との離間を狙っての謀略だったと思われる。

国務と統帥の分離

小磯は、陸軍の「レイテ決戦」が知らない間に「ルソン決戦」に変更されてしまい、参謀本部戦争指導班長・種村佐孝大佐も「大本営機密日誌」(20. 1. 28)に、「小磯総理が両総長から作戦企図に関しては肚を割って何も聞いていないことがわかる。これでは総理大臣として適切な戦争指導は出来なからう。お気の毒だという感を深くした」と書いている。

そこで小磯は天皇に願い出て3月16日、「総理大臣ハ大本営ニ在ッテ終始作戦用兵ノ情况ヲ審ラカニシ陸海軍大臣及大本営陸海軍幕僚長トトモニ戦争指導ノ議ニ参画スベシ」の勅語で、大本営の協議に加わることが許された。日露戦争の桂太郎首相以来40年ぶりのことだったが、昭和の陸軍では、この程度で状況が変わるはずもなく、作戦指導への参加はおろか、作戦情報さえ得られない。小磯自身も軍務局長、次官をやっていて陸相を兼務しなければダメだということは、誰よりもよく知っていた。

- ▽小磯は4日 杉山が 人事の承認を求めてくると「陸相には僕がなろう。参謀総長、教育総監と相談して、至急返事をしてほしい。承認されない場合は、すぐ内閣総辞職をする決心だ」
- ▽夜 杉山が届けてきた返事は「三長官とも予備役の現役復帰、陸相就任は絶対に承認出来ない」
- ▽小磯は 内大臣木戸幸一に辞意「これからは大本営内閣、戦争指導内閣でなければいけない」

●小磯の言葉は大変な重みを持っていた

- ▽陸軍がこれを盾に「後継首相は現役軍人でなければダメだ」と言い出せば木戸の「終戦内閣構想」は 根底から崩れる
- ▽木戸と4重臣 近衛文麿 岡田啓介 平沼騏一郎 若槻礼次郎は「鈴木貫太郎」で一致していた
- ▽最初に 鈴木の名前を出したのは 平沼東京大空襲のあった 3月10日「もう小磯内閣ではダメですね。後は鈴木貫太郎さんに頼んだらどうです」

重光 葵(しげみつ・あきら)

明治20(1887)～昭和32(1957)大分県生まれ。駐ソ・駐英大使を経て昭和18年東条内閣外相、小磯内閣に留任。A級戦犯で禁固7年。27年改進黨総裁となり鳩山内閣外相。日ソ国交回復、国連加盟実現

杉山 元(すぎやま・はじめ)

明治13(1880)～昭和20(1945)福岡県生まれ。陸軍大将・元帥。陸相、参謀総長を経て昭和19年教育総監、陸相に再任。20年4月第1総軍司令官。敗戦翌月に自決

畑 俊六(はた・しゅんろく)

明治12(1879)～昭和37(1962)東京生まれ。陸軍大将・元帥。陸相、支那派遣軍総司令官を経て昭和20年4月第2総軍司令官。A級戦犯で終身禁固刑、29年仮釈放

阿南 惟幾(あなみ・これか)

明治20(1887)～昭和20(1945)東京生まれ。陸軍大将。中佐の時に昭和4年から4年間侍従武官。陸軍次官、第2方面軍司令官、航空総監を経て20年4月鈴木内閣陸相となり、ポツダム宣言受諾の際、御前会議で条件付受諾を主張して東郷外相らと対立。敗戦の夜、割腹自決した

梅津 美治郎(うめづ・よしじろう)

明治15(1882)～昭和24(1949)大分県生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和17年関東軍司令官、19年参謀総長。A級戦犯で終身禁固刑を受け拘置中に病死

種村 佐孝(たねむら・さこう)

明治37(1904)～昭和41(1966)三重県生まれ。陸軍大佐。昭和19年参謀本部戦争指導班長。敗戦直前、第17方面軍参謀となり、シベリア抑留を経て25年帰国。著に「大本営機密日誌」

鈴木内閣へ向けて猛然と動いた岡田

岡田は海兵で鈴木の一後輩、回顧録に「私はこんどは是非とも鈴木貫太郎を出して、いよいよ最後の決断をしてもらおう、と思った」と書いている。3月27日、平沼に「小磯の次に鈴木を首相に阿南を陸相とする内閣を作ったらどうか」と話すと、平沼は当然賛成。

岡田が阿南陸相を考えたのは、二・二六事件で襲撃された際、義弟の首相秘書官・松尾伝蔵大佐が射殺されたが、松尾の娘婿・大本営参謀の瀬島竜三中佐(戦艦總長)から、陸軍の情報を聞いていたから、陸軍が次に陸相に出してくるのは信望の厚い阿南に違いないと思っていた。海軍出身の鈴木内閣最大の難関は陸軍で、この陸相人事の一致が大きかった。

若槻は近衛案だったが、岡田から「近衛は後にとっておくべき人だ」と説得され同意した。近衛が「木戸の意向はどうか」と云うので岡田が訪ねると、「次の内閣で終戦を…それには陛下が腹藏なくお話し合いになれる内閣を作らねばダメだ」と考えていた木戸も賛成した。

木戸は戦後「ともかくものがうまくゆく時、つまり、鈴木総理、阿南陸相が生まれるようなことは、いくら事前に計画しても、そうたやすく出来るものじゃない。鈴木内閣誕生は、通俗な言葉だが、天の助けと云うべきではないかな」と話している。

なぜ77歳、高齢の鈴木だったのか？

7年余りも侍従長として奉仕し天皇の信頼が極めて厚い。意志強固で、天皇の意図を体し誠心誠意、どんな難事だろうと実現に努めるに違いない。天皇が終戦を急がれていることは明らかで、終戦すべき最後の段階に来ている。他方、陸軍は本土決戦、一億玉砕を叫んでおり、表面的には戦争継続を装う必要がある。それには、和平傾斜の



木戸 幸一(きど・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。侯爵。昭和15年内大臣。開戦前、東条を首相に奏請。戦争末期には倒閣、和平工作に尽力。A級戦犯で終身禁固刑、病気で仮釈放。著に「木戸幸一日記」

近衛 文麿(このゑ・ふみまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。公爵。昭和12年6月首相、直後の支那事変収拾に失敗。15年第2次内閣で日独伊三国同盟締結。16年第3次内閣で日米交渉の展望を失い10月総辞職。戦後、A級戦犯に指名され服毒自殺

岡田 啓介(おかだ・けいけい)

慶応4(1868)～昭和27(1952)福井県生まれ。海軍大将。連合艦隊長官、海相を経て昭和9年7月首相。二・二六事件で襲撃され九死に一生を得る。戦争中、東条内閣倒閣と和平推進に重臣の中心となって動く。著に「岡田啓介回顧録」

若槻 礼次郎(わかづき・れいじろう)

慶応2(1866)～昭和24(1949)島根県生まれ。大正15年と昭和6年首相となるも満州事変で辞職。著に「古風庵回顧録」

平沼 騏一郎(ひらぬま・きいちろう)

慶応3(1867)～昭和27(1952)岡山県生まれ。検事総長、大審院長、法相、枢密院議長を経て昭和14年首相。20年4月再び枢密院議長。A級戦犯で終身禁固刑

鈴木 貫太郎(すずき・かんたろう)

慶応3(1867)～昭和23(1948)大阪生まれ。海軍大将。連合艦隊長官、軍令部長を経て昭和4年1月侍従長。二・二六事件で襲撃され、瀕死の重傷を負う。19年枢密院議長。20年4月首相に就任し終戦に当たる。著に「鈴木貫太郎自伝」

疑いをかけられない人物、軍部から警戒されない人物でなければならない。その点、鈴木は軍人出身で、政治的行き掛りもない。人間的にも、まさに將に將たる重量感に富んでおり、行政面に有能な補佐官をつければ、国民一般の信望を集めるのに適当だ、と考えたのだ。

▽木戸は 陸海軍首脳に

「統帥と国務との統合」について 見解を質した

▽杉山 梅津 米内光政海相 及川古志郎軍令部総長 全員が 小磯の意見には 否定的

「この重大時局に、一人で何役も兼ねることは困難、戦争遂行には今の形が一番良いように思う」

▽木戸は これで「鈴木のように現役でない軍人が、首相になるのは可能だ」との 判断を得た

「それに好都合なことに一番難問の陸相には阿南君が来ることがわかっていて、彼は侍従武官を四年やっており、陛下のお気持ちも十分知っている。杉山から内密にその旨伝えられていたので、私の重臣会議に臨む肚は決まったのだ」

●重臣会議は 4月5日午後5時から開かれた

▽木戸の他 元首相の6人 近衛 岡田 若槻

平沼 広田弘毅 東条英機 枢密院議長の鈴木

▽東条が口火 陸軍内閣に持って行こうと

「誰にするかという前に、戦争をやるのか、無条件降伏でもよいのか、それを決めてはどうか」

▽平沼が「この際は戦い抜く人ならざるべからず、打切り和平論者は推薦する能わず」と 応じた

▽会議は「戦争継続」の建前を 認めた上で

現役に限定せず 軍人から選ぶ方向を確認

▽すかさず 近衛が「今迄の行きがかりのない人がよからん」 東条 梅津を排除し 鈴木指名への道

▽平沼は「先の条件に合致する軍人の重臣として、国民の信頼をつなぐ者は鈴木である」

▽近衛 若槻は 直ちに同意したが 鈴木は

「軍人が政治に出るのは国を滅ぼす基」と 辞退

▽東条は 意図する方向からそれ 焦っていた

「敵の本土進攻が予想される段階では、現役軍人でなければならない」と強調し 畑元帥を指名

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和15年陸相、16年10月陸相兼任のまま首相。19年2月参謀総長も兼務したが、サイパン陥落で7月総辞職。戦後拳銃自殺を図ったが未遂。A級戦犯として刑死

米内 光政(まい・みつまさ)

明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。海相を経て昭和15年首相。日独伊三国同盟に反対、陸軍の協力が得られず辞職。19年7月現役に復帰し小磯、鈴木内閣海相。終戦に尽力した

及川 古志郎(おしかわ・こしろう)

明治16(1883)～昭和33(1958)岩手県生まれ。海軍大将。昭和15年近衛内閣海相となり、海上護衛司令長官を経て19年8月軍令部総長。20年5月軍事参議官

広田 弘毅(ひろた・こうき)

明治11(1878)～昭和23(1948)福岡県生まれ。駐ソ大使、外相を経て昭和11年二・二六事件直後に首相。その後近衛内閣外相。A級戦犯で文官中ただ一人刑死

岡田は平沼発言を注釈

それは平沼の、その鈴木がなれば早く平和になることができるという考えを、公に言ったならば、平和もきませんし、鈴木の内閣はできないことになるのであります。(東條の証言)

鈴木辞退の弁

軍人が政治に出るのは、国を滅ぼす基なりと考えあり。ローマの滅亡しかり、カイザーの末路、ロマノフ王朝の滅亡またしかり。故に自分が政治に出ることは、自分の主義上より困難なる事情あり。耳も遠いし、お断わりしたし。

▽木戸は「国内が戦場となろうとしている際だからこそ、一層政治の強化が必要で、国民の信頼あるどっしりした内閣を」と鈴木を強く推した
▽興奮した東条が露骨な威嚇の捨て台詞

●重臣会議は「鈴木推薦」を決定し、夜8時終わる

▽木戸も鈴木を説得した上後継総理に奏上
▽鈴木がお召で参内したのは夜10時過ぎ
▽天皇は「卿に組閣を命ずる」とだけで黙ったまま
▽いつもなら「憲法の条規を遵守するよう、外交は慎重にし無理押ししないよう、国内経済についても急激な政策をとらないこと」3か条の注意
▽藤田尚徳侍従長は

「これは無条件で組閣を命じられたのだなあ」

▽灯火管制のほの暗い御学問所

鈴木は深々と一礼して「鈴木は一介の武弁、従来何の政見を持ち合わせませぬ。『軍人は政治に干与せざるべし』の明治陛下の御聖諭をそのまま奉じて参りました。何とぞ、この一事は拝辞の御許しを願い奉ります」

▽43歳の天皇はニッコリして

「鈴木的心境はよくわかる。しかしこの重大な時に当って、もう他に人はいない。頼むから、どうか枉げて承知してもらいたい」

▽鈴木が「耳が遠くて、陛下のお声も聞こえない時もあるでしょうから」と云うと

「耳が遠くてもよい、聞こえなくてもよい」

▽藤田は「鈴木さんこそ、

陛下の持ち駒として唯一の人であった」

▽鈴木内閣は4月7日成立したが早々に激震に

▽ソ連は5日日ソ中立条約の不延長を通告

7日には戦艦大和が徳之島(麒麟)西方で撃沈

●「大和」の名前が私たちの心に深く刻み込まれるのは海上特攻作戦の悲壮さに

▽世界最強最大の戦艦でありながら

航空機の掩護もなく片道燃料だけで
沖縄に突っ込んで陸上砲台にする

戦艦大和

昭和12年11月4日、呉海軍工廠で起工、開戦直

—「木戸日記」から—

藤 国内が戦場とならんとする現在、余程御注意ならないと、陸軍がそっぽを向く虞れあり。陸軍がそっぽを向けば、内閣が崩壊すべし。

木 陸軍がそっぽを向くと云ふことは此の際重大なるが、何かきざしなり、予感なりがありや。

藤 ないこともない。

木 先程も申せし通り、今日は反軍的な空気も相当強し。国民がそっぽを向くと云ふこともあり得べし。

藤 此の重大時局大国難に当り、苟も大命を拝したるものに、そっぽを向くとは何事か。国土防衛は誰れの責任か、陸海軍にあらずや。

藤田 尚徳(ふじた・ひさり)

明治13(1880)～昭和45(1970)東京生まれ。海軍大将。艦政本部長を経て昭和19年侍従長。著に「侍従長の回想」

……なぜ大和は造られたのか……

大正11年のワシントン会議で、日本の戦艦は「5・5・3」、米英の5に対し3と制限され主力艦の建造休止期間も昭和5年のロンドン会議で5年延長された。満州事変、国際連盟脱退で日米対立が深まり、戦艦の老朽化も進んだ。日本は9年12月、米に海軍軍縮条約破棄を通告、12年から建艦自由時代に。

新戦艦の方針は、最強の戦艦で米海軍を圧倒するため、46号砲とした。この大口径砲を備えるには船体が小さいと砲撃のたびに艦が激しく振動するため、艦幅を広げるなど、見合った規模が必要。米国が太平洋、大西洋両艦隊の効率的運用には幅33.5呎のパナマ運河を通らねばならず、米戦艦は40号砲になるとの読みもあった。

後の16年12月16日完工。総建造費は1億3780万2千円(大和船70円)。全長263尺、最大幅38.9尺。基準排水量6万2千ト、速力27ノット。艦底から最上甲板までは20尺、6階建てピルの大きさ。冷暖房装置を備え「大和ホテル」と称された。

最大の特徴は3連装3基の46号主砲で、砲身21尺。東京から仰角45度で発射すると、砲弾は富士山の2倍の高さを飛んで41号先、大船に着弾した。口径は40号砲に比べ1割5分増だが、威力は4割2分増、30号先の厚さ43号の鉄鋼板を貫いた。魚雷、爆弾が命中しても誘爆に耐えられるよう艦底と砲塔直下の火薬庫の間を三重にして、舷側鋼板も厚さ27号。46号砲は世界でも大和と姉妹艦武蔵(17年8月5日江、19年10月24日レイテ沖海戦)だけで、日本海軍造艦技術の粋と総力を結集したものだった。

- 大和は、日米開戦と共に時代遅れのものに
 - ▽山本立案の機動部隊による真珠湾攻撃成功が海の戦闘のやり方を根底から引っ繰り返した
 - ▽太平洋の戦いは戦艦ではなく空母航空機に
 - ▽大和の戦った相手は全て航空機 その爆弾と魚雷米英戦艦と相撃つ砲戦の機会は1回もなくレイテ沖海戦(19年10月)が敵艦隊に対する46号砲の唯一の発砲記録(駆逐艦1隻沈、1隻大破)

- 大和出撃は慌ただしく決まった
 - ▽連合艦隊は4月6日から沖縄米軍に対する航空総攻撃「菊水1号作戦」発動を決定
 - ▽5日朝司令部地下壕(敷田)の作戦会議で前任参謀神重徳大佐がパッと立ち上がって「第二艦隊はあす菊水1号作戦に参加します。旗艦大和は巡洋艦矢矧、駆逐艦八隻と共に出撃、沖縄沖のアメリカ艦隊、輸送船を攻撃します。主砲をもって敵に最大限の打撃を与えた後、大和は海岸に乗り上げ、乗員は上陸して守備隊を増援します」
 - ▽参謀たちが驚いて豊田副武司令長官を見ると豊田には前夜のうちに了解をとってあった

山本 五十六(やまもと・いそろく)

明治17(1884)～昭和18(1943)新潟県生まれ。海軍大将。大正5年米国駐在、ハーバード大に学ぶ。14年米大使館付武官。昭和11年海軍次官となり日独伊三国同盟に反対。14年連合艦隊司令長官。開戦劈頭の真珠湾攻撃を立案、実行した。前線基地視察中にソロモン諸島上空で米機に待ち伏せされ戦死。死後元帥、国葬

…… 山本は「航空優先論」 ……

昭和10年暮れ、航空本部長の山本五十六は「戦艦より航空機整備を急ぐべきだ」と主張したが、海軍上層部は「艦隊決戦、大艦巨砲主義」だった。山本は大和の設計責任者に、「どうも水を差すようで、すまんですがね、君たちは一生懸命やっているが、いずれ近いうちに失職するぜ。これからは海軍も空軍が大事で、大艦巨砲は要らなくなると思う」と言っている。大和、武蔵の建造費は総額3億円を超えた。開戦当初、無敵を誇ったゼロ戦(零戦上戦闘機)は1機6万5千円。4600機も生産できたことになる。

神 重徳(かみ・しげのり)

明治33(1900)～昭和20(1945)鹿児島県生まれ。海軍大佐。教育局課長のとき東条暗殺を計画したが決行前に連合艦隊前任参謀に転出。戦艦大和の沖縄特攻作戦を立案、実施した。戦後連絡飛行中に津軽海峡に不時着し、行方不明に

豊田 副武(とよだ・そむ)

明治18(1885)～昭和32(1957)大分県生まれ。海軍大将。軍務局長、第4、第2艦隊長官を経て昭和19年5月連合艦隊長官。20年5月軍令部総長。戦犯として収容され23年釈放。著に「最後の帝国海軍」

▽補給担当参謀が 燃料を調べる許可を 求めると
神は「そんな必要はない。第二艦隊は海上特攻
隊という名前に変わる。特攻作戦だから燃料は
片道分で十分だ」

▽神はかねがね「大和が瀬戸内海でむざむざ敵空襲
に潰え去っていいのか、特攻を航空機だけに任
せておいていいのか、大和に悔いなき死に場所
を与え、最後の花道を飾らせてやるべきだ」

▽草鹿龍之介参謀長は「成算もなしに
大和を投入出来ない」と 反対だった

▽草鹿が「菊水1号作戦」指導のため
鹿屋基地に出張中 草鹿不在を狙っての決定

▽神から 電話がかかってきて
「鹿屋は近いから、第二艦隊に行つて出撃命令を
伝えてほしい」と 引導役まで 押しつけられた

●第1艦隊は解散してすでになく、第2艦隊が唯一の
艦隊らしい艦隊

▽草鹿は 三田尻泊地の大和に飛び
司令長官伊藤整一中将に 作戦計画を提示した

作戦計画

- 一、第二艦隊は、明六日抜錨、七日未明、豊後
水道出撃、指定航路を南下し、八日払暁、味
方航空特攻作戦に策応して、沖縄島嘉手納
沖泊地に突入し、敵艦船を攻撃すべし。
- 二、出撃時だけは、なるべく多数の上空直衛
機を配する。
- 三、燃料は片道分しか配給できない。すなわ
ち、帰還の道なき特攻作戦であることを覚
悟すること。

▽大和には 10人の艦長が集められ
草鹿が 連合艦隊命令を伝え 長官訓示を朗読
「皇国ノ興廃ハ正ニ此ノ一挙ニ在リ」

▽若手の駆逐艦長が「連合艦隊最後の作戦だといわ
れるなら、なぜ参謀長は日吉の防空壕を出て、自
ら特攻攻撃の陣頭指揮をとられないのか」

▽「生死はもとより問題でないが、絶対戦果を期待し
得ない自殺作戦には反対だ」「駆逐艦一隻といえ
ども貴重な存在だ。無為に沈んでたまるか」

草鹿 龍之介(くさか・りゅうのすけ)

明治25(1892)～昭和46(1971)石川県生
まれ。海軍中将。空母赤城艦長などを経て
昭和16年4月第1航空艦隊参謀長となり、
真珠湾攻撃を実施した。19年連合艦
隊参謀長、20年第5航空艦隊長官

伊藤 整一(いとう・せいいち)

明治23(1890)～昭和20(1945)福岡県生
まれ。海軍中将。昭和2年、少佐の時に米
国駐在となりエール大に学ぶ。5年まで
駐米大使館付武官補佐官。人事局長、連
合艦隊参謀長を歴任し、16年9月少将で
軍令部次長。開戦以来の作戦を指導し、
19年12月第2艦隊長官となり、大和の沖
縄特攻作戦で戦死。死後大将に昇進

..... 伊藤は容易には納得しなかった
「作戦の基本に腑に落ちぬところがある。七千の将兵を死なせる以上、連合艦隊は我々に何をやらせようとするのか」。草鹿も伊藤の決意を見てとり「要するに死んで貰いたい。いずれ一億総特攻にということになるのであるから、その模範となるよう、立派に死んで貰いたのだ」。肚のうちを明かすと「それなら何をかいわんや、よく了解した」と命令を受け入れた。
しかし途中で艦隊の大半を失い、作戦目的達成が不可能となつては部下を犬死にさせるだけ。指揮官として作戦変更を迫られる。この点、念を押すと草鹿は「一意、敵撃滅に邁進する時、それは自ずから決まることで、一にあなたの心にあることだ」、指揮官判断で行動して差し支えないと答えると、伊藤は「有難う、安心してくれ、気も晴れ晴れした」とニッコリした。
草鹿は「戦争は色々苦しいことがあったが、この時ほど苦しい思いをしたことはない」と回想している。

▽駆逐艦長たちの反対を 収めたのは
伊藤の 万感をこめた 簡潔な一語
「我々は死に場所を与えられたのだ」

●特攻作戦にも、将来への配慮、人の情けもあった
▽大和には 3日前から

少尉候補生53人が 乗艦・訓練中
艦長の有賀幸作大佐は 伊藤と相談して
全員に 退艦を命じた

▽大和の燃料も 往復分が 積み込まれていた

▽命令が「片道燃料分」公式には「2千ト」

▽連合艦隊機関参謀 小林儀作大佐は

「たとえ生還のほとんど見込みのない特攻攻撃
であっても、万一作戦中止となった時、帰って
もこれがないというのは武人の情として忍び
がたい」

▽呉鎮守府軍需部長 島田藤治少将に相談すると
徳山燃料廠(山口)の 石油タンク群は

ほとんど カラッポだったが「帳簿外」の油

▽底の膨らみに 特殊ポンプでないと

吸い上げられない油が かなりの量

▽大急ぎで掻き集め 大和に4千ト(満載艦艙6千3百ト)

矢矧と駆逐艦8隻は 満載にした

●第2艦隊は6日午後3時20分、徳山沖を出撃

▽伊藤は 戦闘指揮の一切を 有賀に任せ

艦橋・長官用椅子に座ったまま 身じろぎもせず

▽7日昼頃 沖縄への半ばに達し 初めて一言

「午前中はどうやら無事ですんだな」

▽午後零時35分 第一波 260機が殺到

四次にわたり 延べ390機の攻撃が 始まった

▽大和の主砲射撃は 3発だけ(謝艙長の話)

▽46号砲は 対空用に三式弾

砲弾1発に 機銃弾1万発が詰まっています

炸裂すると 400発もの 火の筈になる

▽主砲を撃つ時は 爆風で飛ばされないよう

ブザーが鳴り 甲板にいる者は退避

高角砲 機銃配置の者は 鉄板の覆いに隠れる

▽この日は雲が低く 低空で来る敵機の大群を

遠距離で捉えられず 高角砲 機銃対応になった

有賀 幸作(あがこうさく)

明治30(1897)～昭和20(1945)長野県生
まれ。海軍大佐。開戦以来、駆逐艦長、駆
逐隊司令、鳥海艦長として転戦、昭和19
年12月大和艦長。死後中将に2階級特進

「残るも国のため」

有賀は候補生を集めて「大和乗組み
は皆の長い間の念願だったと思う。
しかし、熟慮の結果、今回の出撃には
加えないことにした。沖縄には我々
が行く。君たちには残ってやって貰
いたいことがある。第二、第三の大和
が待っているだろう。それに備えて
よく錬磨し立派な戦力になって貰い
たい。ではご機嫌よう」。

候補生は「覚悟はできている」と懇
願したが、副長の能村(のり)次郎大佐
が「出て行く我々が国のためなら、残
る皆もまた国のためなのだ」と諭す
と、候補生は泣きながら病人10人、老
兵10人と退艦していった。矢矧でも
候補生22人、病人15人が退艦した。

吉田 満(よしかみ)る)

大正12(1923)～昭和54(1979)東京生ま
れ。海軍中尉。東大在学中の昭和18年12
月、学徒出陣で海軍兵科予備学生。大和
で沖縄へ出撃、復員直後、ほぼ一晩で書
き上げたと云われる「戦艦大和ノ最期」
は、占領軍の検閲で発表が許可されず、
刊行は講和後の27年。戦争文学の傑作
と評される。日銀に入り50年監事

伊藤の最期(「艦大和ノ最期」)

参謀長、左手ヲ羅針儀ニ支ヘツツニ
ジリ寄ッテ、長官ニ挙手ノ礼 永キ沈
黙 長官礼ヲ返シ、互ヒノ眸ヲ射ル
粗笨(ばん)無類ナル作戦ノ、最高責任
者、オヨビソノ補佐責任者今ヤ予期
シタル無慙ノ敗北ノ、遂ニ現実トナ

●魚雷は左舷に集中した

▽左舷に11本 右舷に1本 大型爆弾7個が命中

▽大和は 左舷に 大きく傾き

緊急注水して 復元しようとしても 戻らない

▽有賀は 航海長に「艦を北向きに持って行け」

午後2時15分「総員最上甲板」の艦長命令

▽有賀は「俺は艦もろとも行く、若い君たちは泳げ、

退艦を急げ」羅針儀に体を3か所 縛りつけた

▽水兵から 食べ残しの乾パン 4枚を渡され

有賀が 2枚目を口にした時

突然 物凄い轟音と 真っ赤な閃光

▽左側に傾いて 転覆したため

弾薬庫の主砲弾 数百発が 激突発火

誘爆して 瞬時に沈没した

▽午後2時23分 沖縄を隔たる430*の地点

▽連合艦隊司令部は 午後4時29分

「沖縄突入作戦」の 中止命令を出した

「進歩ヲ軽ンジ過ギタ」

大和では、海に飛び込んだ者も艦もろとも巻き込まれ、乗員3332人のうち助かったのは269人。護衛部隊も矢矧、駆逐艦4隻が沈み、1187人が戦死した。米軍損害は航空機10機、12人。

巨大戦艦大和の建造と運命ほど、「艦隊決戦・大艦巨砲主義」に取り憑かれた日本海軍の、思想的画一化を象徴し、その失敗を際立たせたものはなかった。吉田満少尉は「戦艦大和ノ最期」に若い士官たちの言葉を書き残している。「日本ハ進歩トイウコトヲ軽ンジ過ギタ」「不足ナルハ訓練ニ非ズシテ科学的研究ノ熱意ト能力ナリ」

●最後の連合艦隊司令長官小沢治三郎中将は7月30

日、第2艦隊の殊勲を長官名で全軍に布告した

▽連合艦隊が軍令部に 作戦認可を求めてきた時

軍令部次長の小沢は 無謀な作戦を

やめさせたいと「片道燃料」の条件

▽連合艦隊側は 最初から その予定

▽「大和の沖縄特攻は、自分に一番の責任がある」と

言い続けていた 小沢の思いが込められた布告

▽有賀もこの日 2階級特進して 中将に

ッテ目睫ニアリ アラユル諫言 アラユル焦慮 アラユル自嘲 アラユル憤懣 感無量ナルモ宜(か)ナリ

長官、挙手ノ答礼ノママ、静カニ左右ヲ顧ミ、生き残りノ士官一人一人ノ眸ヲ捉フ イザリ寄ル幕僚数名ト、慰勸ノ握手 一瞬微笑マレタル如ク思ハレタルモ、ワレカネテヨリカカル光景ノウチニ勇者ノ微笑ヲ夢想シタリシ故ノ、錯覚ニ過ギザルヤモ知レズ 長身ノ身ヲ翻シテ、艦橋直下ノ長官私室ヘ「ラツタル」ヲ歩ミ去ル

開戦以来、一切ニ無縁、微動ダニセザリシ長官ノ、我ラガ眼前ニ演ジタル行動ハ、スナハチ以上ニ尽ク ソノ後沈没マデ、長官私室ノ扉開カレズ マタ絶エ間ナキ破壊音ノ故カ、自決ノ銃声ヲ聞カズ 携帯拳銃ヲ撫シツツ、身ヲモツテ艦ノ終焉ヲ味ハハレタルカ

第二艦隊司令長官伊藤整一中将、御最期ナリ 艦隊ココニ首上ヲ失ヒ、ヤガテマタ主城ヲ失ハントス

小沢 治三郎(おざわ・じざぶろう)

明治19(1886)～昭和41(1966)宮崎県生まれ。海軍中将。南遣艦隊長官、第1機動艦隊長官、軍令部次長を経て昭和20年5月に最後の連合艦隊長官に就任

連合艦隊告示(7月30日)

昭和二十年四月初旬、(第二艦隊ハ)海上特攻隊トシテ沖縄島周辺ノ敵艦隊ニ対シ、壮烈無比ノ突入作戦ヲ敢行シ、帝国海軍ノ伝統ト我ガ水上部隊ノ精華ヲ遺憾ナク發揮シ、艦隊司令長官ヲ先頭ニ、幾多忠勇ノ士、皇国護持ノ大義ニ殉ズ 皇国ノ至誠、心肝ヲ貫キ、忠烈万世ニ燦タリ ヨツテココニソノ殊勲ヲ認め全軍ニ布告ス

●山本の「日米戦うべからず」を肝に銘じていた伊藤

山本との縁は深かった

伊藤は山本が海大教官の時、その教えを受けており、山本が霞が浦航空隊副長になると、直属の部下になっている。昭和2年少佐で米国駐在を命ぜられた時、駐在武官は山本だった。山本から「可能な限り幅の広い勉強をし、旅行をして自分の目で見て歩け。日本人のいない所に徹する生活をしろ」と云われて、エール大学の寄宿舎に入り留学生生活を始めた。

山本が伊藤をどれほど買っていたか。山本が次官時代、その下で人事局長、連合艦隊司令長官になると参謀長をしている。開戦前の16年9月軍令部次長になったが、大正・昭和の海軍で少将就任は伊藤を含め3人しかいない。

敵将スプルーアンスとも親しい仲

伊藤が駐米武官補佐官になった時、スプルーアンスは海軍省情報課長補佐。職務が同じ情報活動だったことから家族ぐるみの交際をしている。日本の幼い長女に何かプレゼントを探していると、青い目のアメリカ人形を見繕ってくれたのもマーガレット夫人だった。

●出撃命令の日、夫人とお嬢さんに別れの手紙

▽再婚の ちとせ夫人には

23年間の結婚生活が 幸せだったと感謝し
「最後まで喜んでいた」と 伝えることにより

43歳の妻の 余生の淋しさが

少しでも 和らげられたらと 願った

▽結びは「いとしき 最愛のちとせどの」

▽お嬢さん(15歳、13歳)には「最後の教訓」として
「お母さんの様な婦人におなりなさい」

●終戦へ向けての「ポーカー・フェース内閣」

▽「鈴木貫太郎自伝」10数枚の写真の中に

鈴木が トランプの独り占いを 楽しみながら
たか夫人に 煙草の火をつけて貰っている写真

▽トランプを楽しんだのは 長い海軍生活から

伊藤の遺書

— 此の度は光栄ある任務を与えられ、勇躍出撃、必成を期し致死奮戦、皇恩の万分の一に報いる覚悟に御座候

此の期に臨み、顧みるとわれら二人の過去は幸福に満てるものにして、また私は武人として重大なる覚悟をなさんとする時、親愛なるお前様に後事を託して何ら憂いなきは此の上もなき仕合せと衷心より感謝致しおり候 お前様は私の今の心境をよく御了解になるべく、私が最後まで喜んでいたと思われなば、お前様の余生の淋しさを幾分にてもやわらげることと存じ候

心からお前様の幸福を祈りつつ
いとしき 最愛のちとせどの

— 私は今、可愛い貴女たちのことを想っております

そうして貴女たちのお父さんは、お国の為立派な働きをしたといわれるようになりたいと、考えております もう手紙も書けないかも知れませんが、大きくなったら、お母さんのような婦人になりなさいというのが私の最後の教訓です

御身お大切に

淑子さん 貞子さん

— 伊藤の期待は報われなかった —

一人息子の叡(あきら)中尉が伊藤戦死の3週間後、戦死した。叡は海兵72期、戦闘機乗りとして九州出水基地に進出していた。大和出撃の6日に直掩15機の1機として、艦隊前方の警戒に当たっている。息子に、せめて父の艦隊を守らせたいとの配慮だったが、7日の日の出間もなく敵大編隊に囲まれ「無用の犠牲は避ける」との基地の方針で交戦することなく引き返した。

▽長男の一は 書いている

「あれほど正直の徳を讃え、自身も嘘をつけない性格であるのに、あくまで戦うのだと云う顔をして敵を騙し、国民を騙し通してきた結果となったと云うのは、如何にも皮肉である」

▽組閣を終えた心境を「終戦の表情」(讖叢)に

天皇の「終戦」の気持ちを「以心伝心」

どうやって実現するか「最も苦悩せるところ」

—「終戦の表情」から—

官邸の居間に落ちついて、窓外のサクラの満開に何気なく目を落した。「サクラの散りぎわの如く潔く」というのが日本の武人の心構えであり、国民の心情である。だが余は、ふと考えざるを得なかった。悠久の大義に生きるとは、何を意味するのであろうか。国家そのものが滅亡して、果して日本の義は残るのであろうか。生命体としての国家の悠久を万世に生かすとは、国家が死滅して、果して残し得るものであろうか。ローマは亡びた。カルタゴも亡びた。カルタゴなどは歴史的にその勇気をうたわれているが、その勇武なる民はいまもここにあり、一塊の土と化しているに過ぎないではないか。余はこのまま戦争を継続して行けば、日本の滅亡は誠に明らかであると常々考えていた。余の決意の中心となったものは、陛下の思召しが奈辺にあるか、身を以て感得した所を、政治上の原理として発露させて行こうと決意したのである。

所で、陛下の思召しは如何なる所であったろうか。それはただ一言にしていえば、すみやかに大局の決した戦争を終結し、国民大衆に無用の苦しみを与えることなく、又、彼我ともこれ以上の犠牲を出すことなきよう、和の機会をつかむべし、との思召しと拝された。もちろんこの思召しを直接、陛下が口にされたのでないことはいままでもないことであるが、それは陛下の余に対する以心伝心として自ら確信した所である。

だがこの内なる確信は、当時としては深く内に秘め、だれにも語り得べくもなく、余の最も苦悩せるところであった。

しかし28日、特攻隊の掩護に当たっていた叡の戦闘機は、伊江島上空で「空戦に入る」の無電を打ったまま、消息を断った。21歳だった。

そしてちとせ夫人も戦後1年余りで病に倒れ、伊藤の許へと旅立った。

鈴木 一(かずき・ひとみ)

明治34(1901)～平成5(1993) 千葉県出身。貫太郎の長男。大阪営林局長、農商省山林局長を経て、昭和20年4月首相秘書官。戦後、日本馬術連盟会長

…… 和平は口に出せなかった時代 ……

戦後の首相吉田茂は、鈴木内閣成立直後の4月15日、和平運動画策者として憲兵隊に逮捕された。

作家高見順も日記(1月8日)に「日記のことに話が及ぶ。石井君(文藝雑誌)も日記をつけておきたいのだが、いづいどんなことから家宅捜索をうけるかもしれない、その際日記が材料になって罪をうけるということになると困るとおもい、つけられないでいるという。— 嗚呼！ この日記も気をつけたいといけな」と書いている。

吉田 茂(よしだ・ひさる)

明治11(1878)～昭和42(1967) 東京生まれ。駐伊、駐英大使歴任。早くから終戦、和平に奔走、憲兵に逮捕される。21年首相となり5次の内閣を組織。引退後も保守本流元老として大きな影響力。国葬

高見 順(たかみ・じゅん)

明治40(1907)～昭和40(1965) 福井県生まれ。作家・詩人。著に「高見順日記」全8巻「続高見順日記」全8巻「故旧忘れ得べき」「激流」詩集「死の淵より」。死後文化功労者を追贈

●鈴木は実に運のいい人だった

▽昭和に入って 敗戦までの首相

15人のうち 7人までが 非業の死
浜口雄幸 犬養毅 斎藤實が 暗殺され
近衛は自殺 東条 広田が絞首刑
小磯も 無期禁固で服役中に 病死

▽そんな中で 鈴木は 終戦を達成し

昭和23年4月 80歳の天寿を全う

何回も非常時、死の場面に

父が関宿5万8千石の大名久世家の飛び地・大阪久世村の代官をしていて、慶応3年12月その陣屋で生まれたが、鳥羽・伏見の戦いの起きた日だった。よちよち歩きの1歳ちょっとで江戸へ下る途中、島田の宿で街道へ走り出て、馬の蹄の下に転んだが馬が飛び越してくれた。7歳で用水堀に落ち、少尉時代は砲艦天城が座礁、錨をなげるはずみに錨ごと10疋も沈んだ。

日清戦争では、50トンの水雷艇で威海衛の清国艦隊を夜襲、集中砲火の中、防材に爆薬を仕掛けて爆破、「鬼貫太郎」の勇名を馳せた。練習艦金剛で停泊中、砲座で転寝して目が覚めた時、思わず大砲に頭をぶつけ海に転落している。

日露戦争は巡洋艦春日の副長。旅順港外で巡洋艦吉野と衝突し、吉野は沈んだが春日は助かった。駆逐隊司令として旅順港を哨戒中、仮眠していて炭火で一酸化炭素中毒になり、一時意識不明に。日本海海戦では駆逐艦で敵旗艦スワロフに水雷攻撃、夜襲も決行した。

侍従長時代は二・二六事件に

明け方熟睡中に女中さんに起こされ、銃剣をつけた2、30人の兵隊に囲まれた。理由を聞いても黙っている。「時間がありませんから撃ちます」、「それなら止むを得ません。お撃ちなさい」と1問ばかり離れた所に不動の姿勢で立った。途端に発射され、心臓付近に4発当って倒れた。「止め止め」と連呼する中で、たか夫人が「止めはどうかやめて頂きたい」と云うのが聞こえた。指揮官の大尉が入ってきて「止めはやめろ」と命令し鈴木に敬礼する。夫人が名前を

浜口 雄幸(はくち・おち)

明治3(1870)～昭和6(1931)高知県生まれ。民政党初代総裁。昭和4年首相。海軍軍令部の反対を抑えてロンドン軍縮条約調印。軍部、右翼、政友会から「統帥権干犯」と非難され、右翼青年に狙撃さる

犬養 毅(いぬかい・つよし)

安政2(1855)～昭和7(1932)岡山県生まれ。号は木堂。「憲政の神様」と称され、昭和4年政友会総裁となり6年首相。五・一五事件で海軍青年将校に射殺される

斎藤 實(さいとう・まこと)

安政5(1858)～昭和11(1936)岩手県生まれ。海軍大将。昭和7年首相、10年内大臣となり二・二六事件で暗殺される

安藤 輝三(あんどう・てるぞう)

明治38(1905)～昭和11(1936)石川県生まれ。陸軍大尉。歩兵第3連隊に勤務し、皇道派青年将校のリーダーに。二・二六事件では鈴木侍従長邸を襲撃、軍法会議で首謀者として死刑に

…… たか夫人も昭和天皇と縁の深い人

明治38年5月、東京女子高等師範(跡 麹の杖杖)を卒業、竹早町の付属幼稚園の教師をしている時、当時4歳の昭和天皇、3歳の秩父宮の養育係になっている。天皇は誕生間もなく、その頃の宮中の慣習で海軍大将川村純義の里子として育てられた。

川村が亡くなり、東宮侍従長が養育係を探していたところ、自分の孫が幼稚園でたかの世話になっていて人柄に惚れ込んだ東大総長菊池大麓の推薦で、「是非とも」となった。

たかは献身的に仕え、天皇も母親のように慕っていたと云われる。大正4年32歳の時、1男2女を残して夫人を

尋ねると、形を改めて「安藤輝三」と答え、兵隊を集めて引き揚げていった。

一面血の海、駆け付けた医師が滑って転んだほど。鈴木が九死に一生を得たのは、弾丸がわずかに心臓をそれたこと、血止めしてすぐ医師を呼んだ夫人の機敏な処置、そして何よりも「止め」をやめさせた夫人の一言だった。

最後の幸運は終戦の朝

8月15日午前4時過ぎ、徹底抗戦派の一隊が首相官邸を襲撃してきた。鈴木は5月25日の空襲で公邸が焼失してからは小石川丸山町の私邸で寝泊りしており、官邸交換手が機関銃の銃声で私邸に急報した。

間もなくやって来た一隊に焼き払われたが、鈴木は間一髪脱出できた。官邸と私邸の直通電話は3日前に開通したばかりだった。

▽これだけの死地を 強運で 切り抜けてきた
鈴木だったからこそ 肚も座っていたし
天皇との「以心伝心」命懸けで 終戦に

● 鈴木の内閣工作は、陸軍省訪問から始まった

▽「陸軍重視」の姿勢を示した 鈴木の手

4月6日 杉山を訪ね 阿南の入閣を求めた

▽憲兵司令官は「和平内閣」ではないかと疑い
軍務局長に上申 杉山は取り合わなかった

▽陸軍は「組閣に関する要望」として 3条件

一、飽く迄大東亜戦争ヲ完遂スルコト

二、勉メテ陸海軍ノ一体化ノ実現ヲ期シ得ル如キ内閣ヲ組織スルコト

三、本土決戦必勝ノ為ノ陸軍ノ企図スル諸施策ヲ具体的ニ躊躇ナク実行スルコト

▽鈴木は あっさり 呑んだ

▽岡田が 組閣本部に行ってみると

電話のかけ方に 慣れた者さえ いない

驚いて 娘婿の迫水久常に 手伝わせたが

迫水はそのまま 内閣書記官長に

● 7日夜、「わが屍を踏み越えて」の首相談話

失い「やもめ暮らし」をしていた海軍次官、48歳の鈴木に嫁いだ。

川村 純義(かわむら・じゆんぎ)

天保7(1836)～明治37(1904) 鹿児島県生まれ。海軍大将。海軍卿、枢密顧問官。明治34年皇孫誕生と共に養育主任に

菊池 大麓(きくち・だいりく)

安政2(1855)～大正6(1917) 東京出身。数学者。蘭学者箕作阮甫(みづくり・げんぷ)の次男。東大数学科を創設、東大総長を経て明治34年桂内閣文相。帝国学士院長

長男一は首相秘書官に

農商省山林局長から首相秘書官に。耳の遠い鈴木「補聴器」として閣議への出席も許された。

「暗殺を予想してボデーガードになろう。二・二六事件で母が父をかばったように、今度は息子の私が立ち塞がろう。勅任官から奏任官への格下げだが、構っちゃいられなかった」と話している。

迫水 久常(はこみず・ひさつね)

明治35(1902)～昭和52(1977) 鹿児島県生まれ。岡田啓介の女婿。大蔵省に入り岡田首相秘書官を経て大蔵省銀行保険局長の時、鈴木内閣書記官長に就任、終戦実現に努めた。戦後衆院議員、参院議となり、池田内閣経企庁長官、郵政相

内閣総理大臣談話(4.7)

戦局危急をきわむるの秋に当たり、はからずも内閣組織の大命を拝しまして、深く恐懼に耐えませぬ。幸いにして閣僚の選衡を終わり、ただ今、親任式を挙行せられました。帝国自存のためにする今次の戦争は、今やいかなる樂觀も許さぬ重大な情勢に立

- ▽「戦え 戦い抜け」の ハッパ
- ▽国民には「本土決戦に臨む1億玉砕の内閣」として 出発したような感じを 与えた
- ▽秘かに「終戦内閣」を 期待していた人たちにも「異様」としか 思えないような 内容だった
- ▽徳川夢声は「聊力期待外レ。寧ろ平凡デアル。決戦最終内閣ト新聞デ銘打ッテイルガ、コレデ最終ニナレルカドウカ」(新聞記者)
- ▽情報通の富塚清東大教授でさえ「ことごとく古顔の老人ばかり、まことに替わりばえがせぬ。これでまた戦争に邁進するといふのだが、果してどんなことができるか？」(ある学者の戦中記)
- ▽枢密院顧問官の深井英五も「鈴木大将の言説は時として国際親和論に傾くことあり、時として武力進出を主とするものの如くに聞こゆることあり、包容大なるか、定見無きによるかを測るべからず」(枢密院重要議事覚書)と 首をひねった
- ▽外交評論家清沢淵は「要するに『義理』を各方面に果たしたという格好だ。…鈴木大将の誠実はず、ただ誠実尽忠だけでは政治は行えぬ。大河が落下せんとして、まだ渦巻いているといった形ちだ。この内閣では何もできぬ。時勢に押されて、適当の時期を待つだけだ」(戦中記)
- ▽しかし 清沢は「二・二六事件をやった人たちによって起された大東亜戦争を、この人々によって狙われた人たちが收拾しようとしているのである」(4月12日) 鈴木内閣の特質を 鋭く指摘

●「これは和平内閣だ」と思った人もいた

- ▽弁護士今村力三郎は 鈴木と 国務相兼情報局総裁として入閣した 下村宏の名前をみて「そう悟った」と 下村宛ての手紙に書いている

…… 今村の手紙 ……………

「鈴木内閣成立の日に二人の来客あり、野老、新聞を手にして思はず平和内閣が成立したと一言せしに、座客直に其の理由を問へり。野老答曰、鈴木首相は二・二六事件に於て暴徒に襲はれ瀕死の重傷を受けし人也。下村君は曾て自由主義者として軍部より入閣に反対を受けし人也。此両者が閣班に列したる事及大東亜

ち至りました。

ことに相次ぐ崇高なる前線の犠牲、果敢なる銃後の努力にかかわらず、ついに敵の反攻をして、直接本土の一端を占拠せしむるがごとき事態と相成りましたことは、臣子として誠に慚愧にたえぬ次第であります。

万一、形勢かくのごとくに推移せんか、帝国存立の基礎危うしといわねばなりません。しかも、これが匡救(きょうきゅう)の重責は、一億の同胞赤子において、他にこれを求むることは出来ませぬ。驕敵を撃攘し、祖国を守護すべき抗戦力も、また、国民の上御一人に対し奉る至誠の他に存すべきはずはありませぬ。今は国民一億のすべてが、既往の拘泥を一掃して、ことごとく光榮ある国体防衛の御盾たるべきであります。私はもとより老軀を国民諸君の最前列に埋める覚悟で国政の処理に当ります。諸君もまた、私の屍を踏み越えてたつの勇猛心をもって、新たなる戦力を発揚し、ともに宸襟を安んじ奉らんことを希求してやみませぬ。

徳川 夢声(とくがわ・ゆせい)

明治27(1894)～昭和46(1971) 島根県生まれ。漫談家・随筆家。本名福原駿雄。NHKの「宮本武蔵」の放送で話芸は天下第一品と評された。著に「夢声戦争日記」

富塚 清(とみづか・きよし)

明治26(1893)～昭和63(1988) 千葉県生まれ。東大工学部教授。戦後、明大、法大教授。著に「ある科学者の戦中日記」

深井 英五(ふかい・えいご)

明治4(1871)～昭和20(1945) 群馬県生まれ。日銀総裁、枢密顧問官。「枢密院重要議事覚書」を残す

戦は主として陸軍の開始したるものなるに、今に至って総理を海軍に譲るは、戦局の挽回策尽きたる事を表明し、此内閣にて平和回復を企図するもの也。…以上先見にあらず常識にて苟も新聞に眼を通すものは容易に鈴木内閣の使命を了解すべし

●カギを握るのは、誰を外相にするか

▽一切 肚の内は見せずに 外交の大転換 終戦への道を 具体化させる

▽鈴木の外相兼務で スタートしていたが 重光外相秘書官 加瀬俊一に

迫水から「東郷はどうだろうか」と電話

▽7日夜 軽井沢から上京した 東郷茂徳元外相は 鈴木に 入閣条件として 和平の決意を質し

「戦争を継続するのか、やめるのか」と 迫った

▽鈴木が「あと二、三年は大丈夫」と とぼけたため 東郷は「これは駄目だ」と 返事を保留

— 迫水の言葉 —

鈴木は東洋的な肚の人、東郷は黒白をはっきりさせないと気の済まない西欧合理主義のモデルのような人。その違いなんだが、この時点で終戦内閣だなんてハッキリ云えばえらいことになる。そこをわかって貰うのに苦労した。

▽9日には 内大臣木戸の意向を受けて

秘書官長の松平康昌が

「天皇の意思が和平にある」ことを 伝えた

▽鈴木も 東郷の「戦争は一年続けることも困難」

戦争見通しを承認し「外交は任せる」と保証

東郷は9日夜 やっと 外相就任を承諾

●アメリカにどんな「和平」の合図を送っていたのか？

▽平川祐弘(元大蔵)「平和の海と戦いの海」

前書きに「平和のために

身命を賭した人々を 忘れたくないと思った」

▽鈴木は 4月12日 ルーズベルトが急死すると

早くも アメリカ国民に向けて

意味深長な挨拶を 送った

清沢 冽(きさわ・きよし)

明治23(1893)～昭和20(1945)長野県生まれ。中外商業新報、朝日記者を経て自由主義的な外交・政治評論で活躍。戦中日記「暗黒日記」は貴重な現代史資料

今村 力三郎(いまむら・りきさぶろう)

慶応2(1866)～昭和29(1954)長野県生まれ。足尾鉍毒など、人権派弁護士として活躍し、昭和21年に専修大総長

下村 宏(しもむら・ひろし)

明治8(1875)～昭和32(1957)和歌山県生まれ。号は海南。台湾総督府総務長官を経て朝日新聞副社長となり、二・二六事件直後に広田内閣閣僚候補に挙げられたが、陸軍に排斥された。昭和18年日本放送協会会長。鈴木内閣で国務相・情報局総裁。著に「終戦記」「終戦秘史」

加瀬 俊一(かせ・としかず)

明治37(1904)～平成16(2004)千葉県生まれ。昭和15年松岡外相秘書官。開戦時は北米課長、18年重光外相秘書官。戦後は国連大使、ユーゴスラビア大使。著に「日本外交の主役たち」

東郷 茂徳(とうごう・しげのり)

明治15(1882)～昭和25(1950)鹿児島県生まれ。駐独、駐ソ大使を経て東条内閣外相。大東亜省設置に反対して辞職、20年4月鈴木内閣で再び外相、終戦に尽力した。東京裁判で禁固20年、拘置中に病没。著に「大戦外交の手記-時代の一面」

松平 康昌(まつだいら・やすまさ)

明治26(1893)～昭和32(1957)福井県生まれ。侯爵。明大教授を経て昭和11年内大臣秘書官長。戦後、宮内省式部官長

▽ニューヨーク・タイムズ(15日)は 3面トップで
JAPANESE PREMIER
VOICES "SYMPATHY"

「日本の首相「弔慰」を表す」と 伝えた

▽海外向けで 軍部検閲のない 同盟通信で打電

▽国内は「米英撃滅」一本槍の時

ほとんどの新聞が「天誅」と書いた

▽ヒットラーも「運命は歴史上最大の戦争犯罪人

ルーズベルトを、この地上より遠ざけた」と声明

平川さんは書いている

和平への政治的配慮を秘めた第一声、手探り
にも似た最初のサインだったと思われ、それ
はグルーには確実に届いたようだ。

▽開戦までの駐日大使 グルーは

19年末 国務次官に 返り咲いていた

▽米国内の反応は 亡命作家トーマス・マンの

ドイツ国民向け放送となって 表われた

▽19日「東洋の国日本はいまなお騎士道精神と

人間の品位に対する感覚が存する」と 放送した

●鈴木終戦工作の難しさは、陸軍の認めない終戦は
終戦にならないことだった

▽連合国は カサブランカ会議(18年1月)

カイロ宣言(18年12月)で 日本に 無条件降伏要求

「むしろ一億玉砕の道を選んだ方が潔い」

▽仮に 講和が成立しても

軍部が反乱を起こせば 收拾しがたい最悪事態

ソ連は日ソ中立条約不延長を通告

佐藤尚武駐ソ大使の話だと、4月5日に文書で
届けてきた。ヤルタ会談(2月4日~11日)で「ドイツ
降伏後の対日参戦」を決めておきながら、佐藤
にはぬけぬけ「対日方針に何の変更もない」と
言っていたモロトフ外相。面と向かっては言
いにくかったのだろう。佐藤の面会は数日後、
「条約はなお一年有効だ」と念を押すと、洪々
「その通り」と一言云っただけだったと云う。

▽加瀬は「この通告は、新内閣の外交的展望を
著しく陰惨たらしめるものであった」

ニューヨーク・タイムズの記事

鈴木貫太郎首相は、ルーズベルト大
統領の死に際してアメリカ国民に対
し「深甚なる弔慰」を表した、と昨日、
日本の同盟通信は打電してきた。同
盟通信の北米向け英語の無線による
と、日本の新首相は同盟の一記者に
向って次のように語った由である。

「アメリカ側が今日、優勢であるに
ついては、ルーズベルト大統領の指
導力が非常に有効であって、それが
原因であったことは認めなければなら
ない」、そして首相はつけ加えた。
「であるから私は、ルーズベルト大統
領の逝去がアメリカ国民にとって非
常なる損失であることがよく理解で
きる。ここに私の深甚なる弔慰を米
国民に表明する次第です」。

グルー (Joseph Clark Grew)

1880~1965 米国務次官を経て昭和7年
駐日大使。17年まで駐在、日米関係改善
に努力した。帰国後は国務次官、国務長
官代理に就任。著に「滞日十年」

トーマス・マン (Thomas Mann)

1875~1955 ドイツの作家。ナチスを批
判し昭和8年スイスに出国、13年アメリ
カに亡命した。著に「魔の山」

トーマス・マンの放送

鈴木終戦の弔慰に触れて「これは私たちア
メリカにいる者にとっても、意外な、驚
くべきことでありました。日本はいま
アメリカと生死を賭けた戦争をしてい
ます。野心的な封建的な一群の指導者
が日本をこの戦争に引きずりこんだの
です。だがナチスの国家主義者が、わが
みじめなるドイツ国にもたらしたと同
じような道徳的破壊と道徳的麻痺が、
軍国主義の日本で生じたわけではなか

▽ソ連の参戦は 何とか 防ぎたい

無条件降伏だけは 何としても 避けたい

▽この気持ちが 対日参戦を決めているソ連に
和平仲介を依頼すると云う 幻想を生むことに

●東郷外相が動いたのは4月20日

▽ソ連のマリク大使に会って

国連創設会議(25日ワシントン)に出席する
モロトフの帰国ルートが シベリア経由なら
会談を希望したが 大西洋ルートだった

▽22日 河辺虎四郎参謀次長が 東郷を訪ねてきた

「ソ連軍、極東の動き急」

「大本营機密日誌」は4月16日、「チタ領事館員
の目撃伝書使が四月上旬視察したところによ
れば、ソ連は極東に狙撃師団及び相当数の飛
行機、戦車の輸送を開始していることが明ら
かになって来た。ソ連の対日参戦の肚が決っ
て来たものとして、その時の判断及び対応措
置の確定が急速に必要となって来た」。

▽河辺は 極東情勢を説明して

「どうかソ連を参戦させないようにしてほし
い。東郷一生一代の大仕事として、対ソ工作を
大胆にやってほしい」と力説 「事は秘密を要
する。最小限の閣僚と両総長だけで進めたら
どうか。軍部内に関する限り、自分は全力で外
相を支持するし、陸軍にも大いに支援させる」

▽陸軍が 非公式とはいえ

終戦工作を提案してきたのは 初めてのこと

▽東郷は 直ちに 行動を起こした

時間的余裕もないし 特に妙案もないとすれば
軍部提案を利用して そこにチャンスを求める

▽最終の狙いは 終戦そのものにあるのだから

それには 軍も認めている

ソ連に仲介を依頼する以外に 方法はない

●最高戦争指導会議を構成員だけで開くことに

▽首相 外相 陸海軍大臣 両総長の6人で

終戦工作を 忌憚なく話し合い 合意を形成する

「他言無用 絶対秘密」を 申し合わせた

.....
った。あの東洋の国日本は、いまなお騎士道精神と人間の品位に対する感覚が存する。いまなお、死に対する畏敬の念と偉大なものに対する畏敬の念とが存する。これが日独両国の差異である。かつて世界で最も教養ある国民と自負したドイツ人が、いまルーズベルト大統領の死に際して、どのように振舞うかを見ると、つくづくドイツのみじめさが身にしみて感ぜられます」
.....

佐藤 尚武(さとう・なかつ)

明治15(1882)～昭和46(1971)大阪生まれ。ベルギー大使、フランス大使を経て昭和12年林内閣外相。17年ソ連大使。戦後は参院議員となり24年議長

河辺 虎四郎(かべ・とらしろう)

明治23(1890)～昭和35(1960)富山県生まれ。陸軍中将。ソ連、ドイツ駐在武官、昭和20年4月参謀本部次長

最高戦争指導会議

小磯内閣時代の19年8月5日、従来の大本营政府連絡会議を廃止して設置された。構成員のほか陸海軍次官、両次長、必要に応じて関係閣僚、また幹事役として内閣書記官長と軍務局長が出席するのが慣例になっていた。

ところが、議題は全て幹事が準備してきて、説明もする。幹事の話は部下にも伝わるし、部下の統制上、余り弱いことも云えない。人数も多く、どうしても議論が強い方に傾く。

東郷は「メンバーを首脳だけにしたことが、しまいまで非常に役立った。外務省幹部にも6月末まで、会議内容はほとんど知らせなかった」と話している。

- 「無条件降伏」の悪い前例が眼前に発生した
 - ▽ムッソリーニは 4月27日
 - パルチザンに捕まり 翌日銃殺 61歳
 - ▽ヒットラーも 30日
 - ベルリンの地下壕で自殺 56歳だった
 - ▽ドイツは 5月7日 無条件降伏
 - 事前に 何の停戦交渉もなく
 - 「ドイツ全滅」と云う形で なし崩しに
 - ▽「無条件降伏」への アレルギーと共に
 - ドイツ降伏後 米英とソ連の利害が対立し
 - ソ連が日本に 好意的な斡旋をしてくれるかも
 - 希望的な観測を 生むことにもなった

- 6首脳だけの最高会議は5月11日に開かれた
 - ▽東郷は 初日の話し合いを 総合して
 - 「次のようになりますね」と 全員の意思を確認
 - 一、ソ連の参戦を防止する
 - 二、出来得ればソ連の中立をして日本に好意あるものにさせる
 - 三、ひいてはソ連をして米英と日本との平和を斡旋させる

▽こうして 最高会議は 初めて
終戦を志向する話し合いに 入ることが出来た

外務省編纂の「終戦史録」

「本会議開催の日本終戦史上における意義は極めて大なりと云うべきである」

- 日本政府の終戦工作は「ソ連の仲介」一本槍に
 - ▽会議は 12日 14日と 続けられ
 - 対ソ交渉の代表を 広田元首相と決め
 - ソ連に代償として 何を与えるかの話し合いに
 - ▽南樺太の返還 北満鉄道 内蒙古
 - 場合によっては 千島列島の北半分放棄
 - ▽大体の合意が出来たが 阿南陸相が発言した
 - 「日本はまだ広大な敵の領土を占領している。敵はまだ日本領土のうち、極めて一部に足をかけたのに過ぎないのだから、米英との和平条件を議するには、この現実を基礎として考慮する必要がある」

…… 大本営機密日誌(5.1) ……

「これで日本は全世界を相手にして一國で戦争しなければならぬ。しかも戦勢は日一日として不利となっていく。この時に当って、鈴木老宰相は何を考えているのだろうか…。和戦を決する最高方策は決しようとしても決し得ないものもある。事を決してもなお言い得ないものもある。この辺の呼吸は誰が知ろう」

最高会議は「終戦」の方向へ

まず梅津参謀総長が、ソ連の極東への兵力移動を説明し、「太平洋と満州との両正面作戦に対して万全の備えをすることは出来ない。従って、外交によってソ連の参戦を防止することが絶対必要だ」と強調した。ソ連から石油を供給してもらったらどうか、などの意見も出た。

東郷はいい機会だと思って「日本の戦況が悪化の一途をたどっている今日、ソ連に日本に対して好意ある態度をとらせることは最早望みがないから、日本としては、むしろ戦争終結の努力を始めるべきだ」と、議題を終戦の方向へ持っていった。

すると、鈴木首相が口をはさんだ。「外務大臣の云う通り、ソ連をして日本に好意ある態度をとらせようとしても、もう時機遅れになっているのかも知れないが、だからと云って、何ら外交の手を打たないと云うのも面白くない。何かやってみようではありませんか。そして、外務大臣の云う通りだとすれば、和平の仲介でも頼んでみたらどうですか」。

幸い、誰からも異義は出なかった。

▽東郷は 強く 反駁した

「そのような条件でソ連に仲介を頼むならば、交渉は不成立に終わる外はない。陸相は日本は現状に於て、むしろ勝っていると主張するけれども、そんな主張はこの交渉では通用しない」

▽険悪な空気になったが 米内海相が

「この話はしばらく触れないことにしよう」
この議論で それまでの 3日間の成果が
フイになることを 恐れたのだ

●私たちは、ソ連が臆面もなく日ソ中立条約を破って、満州に攻め込んできたことを知っている

▽そのソ連に 和平の仲介を頼んだことは

「愚策以外の何ものでもなかった」と
強く 感ずるのだが…

— 東郷は反論している —

日本の降伏決行は、あの時機を失したしまったならば、由々しいことになったに違いないが、あの時機に、あの程度の小さな混乱だけで、それを決行し得たのは、終戦についての原則的理解が六人の間に成立していたからであると言い得ると思う。即ち、五月中旬にあの合意を取り付けてあったと云うことは、八月になって、降伏と云うことを私どもが持ち出した際、陸軍をして、終戦そのものに対して根本的な反対をなさしめずに済んだ大きな原因の一つになったと信ずる。

(25年1月30日 巢鴨拘留所で 米国戦略爆撃調査団の質問に)

▽東郷は こうも云っている

「もし、和平の気持ちを政府及び統帥部が十分考えないうちに、十分その頭が練れないうちに、突然和平の話に持って行くと云うことでは、成立も難しい。そのことを十分に納得してからでないと、結局は非常な騒ぎが起こる。全般的な話し合い、全般的な気持ちを醸成することが極めて大切だったのだ」

…… トルーマンは微妙な放送 ……

ドイツ降伏直後の8日、「日本の陸海軍が無条件降伏するまで戦う」と、世界に向けてラジオ放送した。それは、ルーズベルトが主張していた「日本の無条件降伏」ではなく「日本の陸海軍」となっていた。

また「日本を今日の破滅の瀬戸際に追い込んだ軍国主義者の一掃を図るが、しかしそれは、日本国民の絶滅ないしは奴隷化を意図するものではない」とも語っていた。

これを根拠に「対米交渉をすべきだった」と云う意見もある。

— 平川さんは書いている —

まず念頭に浮ぶのは、第二次大戦におけるドイツの無条件降伏と日本の降伏の違いである。ヒトラー暗殺に失敗した一九四四年の七月二十日以後、ドイツは自国民の力で平和を回復する力をついに持ち得なかった。それに対して日本は、その政府部内の自主的努力によって、平和を回復するにいたるのである。

27

45 新編東V

..... 意欲を燃焼して下.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

..... 意欲の本目..... 意欲の本目..... 意欲の本目.....

「鈴木貫太郎内閣成立、その日大和は沈んだ」関係年表

昭27	1894	8. 1 日本、清国に宣戦布告。日清戦争	昭20	1945	2. 7 平沼騏一郎が重臣上奏(9日広田弘毅、14日近衛文麿、19日若槻礼次郎、牧野伸顯、23日岡田啓介、26日東条英機)
35	1902	1. 30 日英同盟調印			2. 10 スターリン、ルーズベルトに「ドイツ降伏後2、3か月の対日参戦」を約束
37	1904	2. 10 ロシアに宣戦布告。日露戦争			2. 11 ヤルタ会談終わる。共同宣言発表
38	1905	5. 27 日本海海戦。バルチック艦隊を破る			2. 19 米軍、硫黄島に上陸
大正3	1914	7. 28 第1次世界大戦始まる			3. 10 334機のB29、東京大空襲。江東全滅
11	1922	2. 6 ワシントン会議で海軍軍縮条約調印			4重臣の会合で、平沼「鈴木内閣構想」
昭4	1929	1. 22 鈴木貫太郎海軍大将、侍従長に			3. 16 小磯首相、特旨により大本営に列す
5	1930	4. 22 ロンドン海軍軍縮条約調印			小磯、重慶工作に繆斌を東京に招く
6	1931	9. 18 柳条湖で満鉄爆破、満州事変始まる			3. 21 大本営「硫黄島玉砕」発表
7	1932	3. 1 満州国建国宣言			小磯、最高会議に繆斌工作提案。外相ら反対
8	1933	3. 27 日本、国際連盟を脱退			3. 26 米軍、沖縄西部の慶良間列島に上陸
9	1934	12. 29 日本、米に海軍軍縮条約破棄を通告			3. 27 4重臣は「鈴木首相、陸相に阿南惟幾」の後継構想。内大臣木戸幸一も賛成
11	1936	2. 26 二・二六事件。陸軍青年将校が斎藤實内大臣、高橋是清蔵相ら殺害、鈴木侍従長重傷。岡田啓介首相、難を免れる			4. 1 米軍、沖縄嘉手納海岸に上陸開始
		3. 6 陸軍、広田弘毅内閣の組閣に干渉			4. 5 小磯内閣総辞職。鈴木貫太郎に大命
12	1937	12. 31 海軍軍縮条約失効。自由建艦時代に			連合艦隊、大和に「海上特攻」命令
		7. 7 盧溝橋事件勃発。支那事変始まる			ソ連、日ソ中立条約不延長を通告
		11. 4 戦艦大和、呉海軍工廠で起工			4. 6 大和以下10隻の第2艦隊、徳山沖出撃
		11. 20 大本営と大本営政府連絡会議設置			沖繩に航空総特攻の「菊水1号作戦」
14	1939	9. 1 第2次世界大戦始まる			4. 7 鈴木内閣成立。陸相に阿南
15	1940	3. 30 南京に汪兆銘の国民政府成立			鈴木首相「屍を踏越えて進め」と放送
		9. 27 日独伊三国同盟、ベルリンで調印			大和、徳之島北西洋上で撃沈される
16	1941	4. 13 日ソ中立条約、モスクワで調印			4. 8 陸軍は「決号作戦」のため、第1総軍司令官に杉山元、第2総軍に畑俊六元帥
		6. 22 ドイツ軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる			4. 9 外相・大東亜相に東郷茂徳元外相
		10. 18 東条英機内閣発足。東条は陸相兼任			4. 12 ルーズベルト大統領死去
		12. 8 太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃			4. 15 東京憲兵隊が吉田茂ら逮捕
		12. 16 戦艦大和完工(武蔵17年8月5日)			4. 19 鈴木首相、特旨により大本営に列す
17	1942	6. 5 ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失			4. 20 東郷、マリク・ソ連大使と会見
		8. 7 米軍、ガダルカナルに上陸開始			陸軍、「皇土決戦訓」を全軍に布告
18	1943	1. 14 米英首脳がカサブランカ会議。「日独伊三国の無条件降伏の原則」決定			4. 22 参謀本部、東郷に対しソ工作申し入れ
		2. 1 ガダルカナル撤退開始(7日)			4. 25 サンフランシスコで国連創設会議
		9. 8 イタリア無条件降伏			4. 28 ムッソリーニ、パルチザンに銃殺
19	1944	12. 1 米英支首脳「カイロ宣言」。「日本の無条件降伏を戦争遂行の最終目標」に			伊藤叡中尉、伊江島上空で戦死
		3. 22 陸軍、沖縄など防衛の第32軍編成			4. 30 ヒットラー、ベルリン地下壕で自殺
		6. 6 連合軍、仏ノルマンディに上陸			5. 7 ドイツ、連合軍に無条件降伏
		6. 15 米軍、サイパン島に上陸開始			5. 8 トルーマン、「日本の陸海軍が無条件降伏するまで戦う」とラジオ放送
		6. 19 マリアナ沖海戦。空母3隻を失う			5. 9 政府「ドイツ降伏は遺憾だが、日本の戦争遂行決意は不変」と声明
		7. 7 サイパン島守備隊玉砕			5. 11 最高会議、構成員6人だけの首脳会議
		7. 18 東条内閣総辞職			5. 14 最高会議「和平にソ連仲介」方針決定
		7. 20 ヒットラー総統の暗殺未遂事件			5. 31 米軍、沖縄・首里地区を占領
		7. 22 小磯国昭・米内光政連立内閣成立			6. 23 牛島満第32軍司令官ら沖縄南部摩文仁で自決。沖縄の組織的抵抗終わる
		8. 5 大本営政府連絡会議を廃止して最高戦争指導会議を設置			7. 26 連合軍、ポツダム宣言発表
		10. 20 米軍、レイテ島に上陸			7. 30 連合艦隊、全軍に第2艦隊の殊勲布告
		10. 24 レイテ沖海戦。戦艦武蔵沈没			8. 6 広島に原爆投下(9日長崎)
		10. 25 神風特別攻撃隊、レイテ沖に出撃			8. 8 ソ連、日本に宣戦布告
		11. 1 サイパン発進のB29、東京を偵察			8. 9 ソ連軍、満州、朝鮮、樺太で侵攻開始
		11. 7 スターリン、日本を「侵略国」と非難			8. 15 敗戦。鈴木内閣総辞職(17日勅諭内閣)
		11. 10 汪兆銘南京政府主席、名古屋で病死			4. 17 鈴木貫太郎死去。80歳
		12. 19 大本営、「レイテ決戦放棄」を決定			
		12. 23 第2艦隊司令長官に伊藤整一中将			
20	1945	1. 9 米軍、ルソン島リンガエン湾に上陸	23	1948	
		2. 4 米英ソ三国首脳、ヤルタで会談			